414
27

日本名寶集

同刊行會編

第二卷

始

日本名寶集 二

414-27

日本名寶集第二卷略解

二一　觀世音菩薩立像

東京帝室博物館藏

（總高　三尺五寸）

本像背面の貼紙に聖德太子御時代百濟より彫刻の千像の一體なりとあり。然れども固より僅たる根據を有せず、寧ろ其著右なる風丰悠遠なる姿態は、我朝最初期に於ける木彫の遺品たるを語るに似たり。其生へ際の額部正面に於いて突入し、兩側に於いて角形をなしたるは前面に於ける重厚なる天衣の交叉魚鱗狀をなせる兩側の天衣兩肩を掩へる上衣の一部が上肘に於いて反轉せる、ハート型をなせる胸前の瓔珞と相俟ちて直ちに夢殿の觀世音を聯想せしむる事を得べきなり。

二二　押出三尊佛金銅板

御物

（總高　一尺二寸九分）

御物には押出佛數體收藏せらるゝも本圖のものは、群を拔いて樣式を異にす。押出佛の多くは三尊又は五尊の集合形式を取り、圖樣は多く初唐に則り、[illegible]若くは是に二聲間を配せるものなり。壺坂橋寺の彌佛亦規を一にす。蓋本圖のもの此構想に異り、上部に過去七佛を配せるは、洵に稀有の遺品たらずんばあらず。其製法たるや思ふに金屬の原型を造り、是に薄き銅板を押し當て鉛板の類を以て是を掩ひ槌にて打ち出し后に鍍金せしものならむ。

二三　觀世音菩薩立像

[illegible]山中三郎氏藏

（總高　壹　尺）

白鳳期のものにして其時代思想に順應したる作品たり。前代の雷拙を脫して、技巧圓熟の境に入り、姿態に溜滯の痕なく、慈感愛ね備はるも是を前代に比して遙に風格の下るを覺ゆ。

二四　普賢菩薩像

大倉集古館藏

（總高　四尺五寸四分、横　三尺五寸五分）

傳來に曰く、中尊寺より出づと、細金彩色の木彫にして寄木造なり。修補の跡少なく普賢と象と共に藤原中期以下の作品として見るべきものゝ一に屬す。震火に罹せられたる大倉集古館唯一の佛像遺品として重藏せらる。

二五　聖觀世音菩薩立像

東京帝室博物館藏

（總高　三尺四寸五分、臺座　一尺一寸五分）

技巧纖細を極め色漆を用ゐて巧みに截金と彩色との調和を計り肉身には金箔を押し眼白毫及び唇に水晶を嵌して專ら寫眞に努めたり。瓔珞銅鐶の裝飾亦大に見るべきものあり。南北朝期を下らざる作品として技巧の上に推奬するに足る。

二六　能面般若

東京帝室博物館藏

（縱　八寸二分、横　五寸八分）

能樂は足利初期より行はれ次第に流行を極め當時の檢閲は其技に長ぜるものを擧げて一家の專業たらしめたり。隨つて是に用ふる假面製作も亦專門家を出すに至り、增阿彌、福來春、世實、來、出目、并關派等の名工輩出するに至れり。掲ぐる圖は笠江井關流の家重の作るところ、家重は正保年間の名人なり。

二七、二八　厨子扉繪

東京美術學校藏

（縱　三尺四寸五分、横各一尺一寸四分）

これ前卷に掲出したる扉繪の一部にして、梵天帝釋並に四天王を描けるもの。金光明經の所說に基く。これ等の圖樣は著しく奈良朝の特色を發揮すべければ從來儀軌以前の作とせられしも、吉祥天並に此の厨子が永正頃の

大正
14. 10. 6
内交

創作なるに徴し、繪も亦藤原期のものと断定せらるゝに至れり。恐らくは古圖を摸して描けるものならむ。

三〇　扇面寫經下繪

東京帝室博物館藏

（竪　七寸六分、上部　一尺六寸）

平家時代の所謂引目鉤鼻式畫風は主として此の寫經下繪に於て見ることを得。扇面法華經は大阪四天王寺、法隆寺、近江西教寺、東京帝室博物館及び個人の手に歸したるも一二葉ありといふ。本圖は勿論寫經用として作られたるものならむも、經文の記寫なければ、畫風を見るには一層便利なり。これを後の嚴島納經の扉繪に較ぶれば、稍粗描を免れず。即ちこれ此の形式の最古を物語るものと謂ふべし。

三一　孔雀明王像

東京美術學校藏

孔雀明王は延命利益の本尊にして、王朝時代、其信仰の盛なりしは、古記錄に散見するところ多きに徴しても明かなり。本圖は四臂像にして、蓮華、倶縁果、青蘚果、孔雀尾を持する最も普通の形容なり。他に二臂像、六臂像、八臂像等あり。國寶として有名なるは、法隆寺にあり、仁和寺にもあり、民間にては橫濱原氏のもの最も名高し。

三二　隨身庭騎繪卷

德川達孝伯藏

（紙本淡彩　竪　九寸五分、全長　七尺八寸）

此の繪卷古傳に中院雅家卿の筆といふ。然れども其筆僞明かならず。雅家は定家の子、冷泉又は中院と號し、官正二位權大納言に至る。後出家して融覺と呼べり。父定家に劣ぎて和歌の宗たり、加ふるに丹青の技に長ぜしといへども或は其餘技に成れるもの歟。筆致頗る信實に似たり。恐らくは猶研究の餘地あらむ。

三三　春日權現靈驗記繪卷

（紺本著色　竪　一尺四寸四分）

鎌倉時代の繪卷中、其色彩の緻密にして豐麗なる、其構圖の變化に富める、上は貴族紳士より、下は陋巷の男女に至るまで、最も詳細に描寫し、人物風景併せて渾一の美を發揮せるもの、實に本繪卷を以て隨一とすべし。全部二十卷。春日權現の靈驗を記して餘さず。筆者は高階隆兼と稱せらる。

三四　山水圖

東京美術學校藏

（紙本墨畫、大ヶ原寸）

鎌倉末期歸化僧一山によつて源を發し、可翁如拙を經て益々發達したる北宋畫は、如拙の高弟周文の出づるに及び、こゝに大成せられたり。周文は薩摩の人、明人秀文と並びて當代の泰斗と稱せらる。本圖樓閣山水は、紙本墨畫の小品なれども、氣韻高邁、筆力勁健、北宋派の眞髓を捉へて遺憾なきものと謂ふべし。

三五　育王山圖

三井八郎右衛門氏藏

雪舟は絕世の大家、其本名を小田等伯と呼べり。備中赤濱に生れ、如拙周文の畫風に學びて其技を練り、後鎌倉に轉じて禪を修め、更に明に渡航して彼の地の山水を漁り、多くこれを筆にす。本圖赤明國土產の一なるべし。一世の名家が名品敢て多きを費するの要なけむ。

三六　觀櫻圖

鍋島賀侯爵藏

傳岩佐勝以の筆。勝以は浮世繪の鼻祖、世に浮世又兵衛と稱す。其遺品中有名なるは、川越東照宮の三十六歌仙繪額、并伊伯の彦根屏風等を推す。本圖は德川初期の花見の景を寫したるにて、繚亂たる花の蔭に武士も婦女も入亂れて種々なる春に興をやる態描きて其に盡るものあり。

三七　賀知章孝經

御物

（經　八寸六分、横　一丈八寸）

接粘麻牋九葉より成り、紙尾に小楷にて、延隆二年冬十月重粘表賀豈墨蹟の十四字を題す。義士風の草書にして、筆法遒勁、變化の妙を極む。筆者賀知章は唐代の人、玄宗に事へて集賢院學士兼祕書監となれり。

三八　李善註　文選

東洋文庫藏

國寶として指定せられたる武藏稱名寺の文選十九本の殘缺にして、故あつて支那人の手に歸したるが、今や幸にして本土に再船せられたるものなり。四卷中一卷には金澤文庫の印あり。通じて二本となすべし。王朝時代の寫本として、我國文獻の上に、重要のものたるを失はず。

三九　白銅　水瓶

御物

（銅周圍　一尺九寸三分）

白銅製にして口蓋の龍頭並に其龍身及び線描の龍馬と、瓶の底部とには、悉く金色を施せり。瓶底には二十四個の純金製の丸鋲を打ち、龍眼には練玉を嵌せり。羽翼ある馬は六朝及び唐代の遺物に多く見る所にして、其思想は遠く波斯希臘より西域を通じ傳々來來す。形式意匠實に永旅中の最高位置を占むるものなりとす。

四〇　金銀蒔繪經箱

川崎芳太郎氏藏

（竪　一尺八分、横　七寸七分、高　五寸七分）

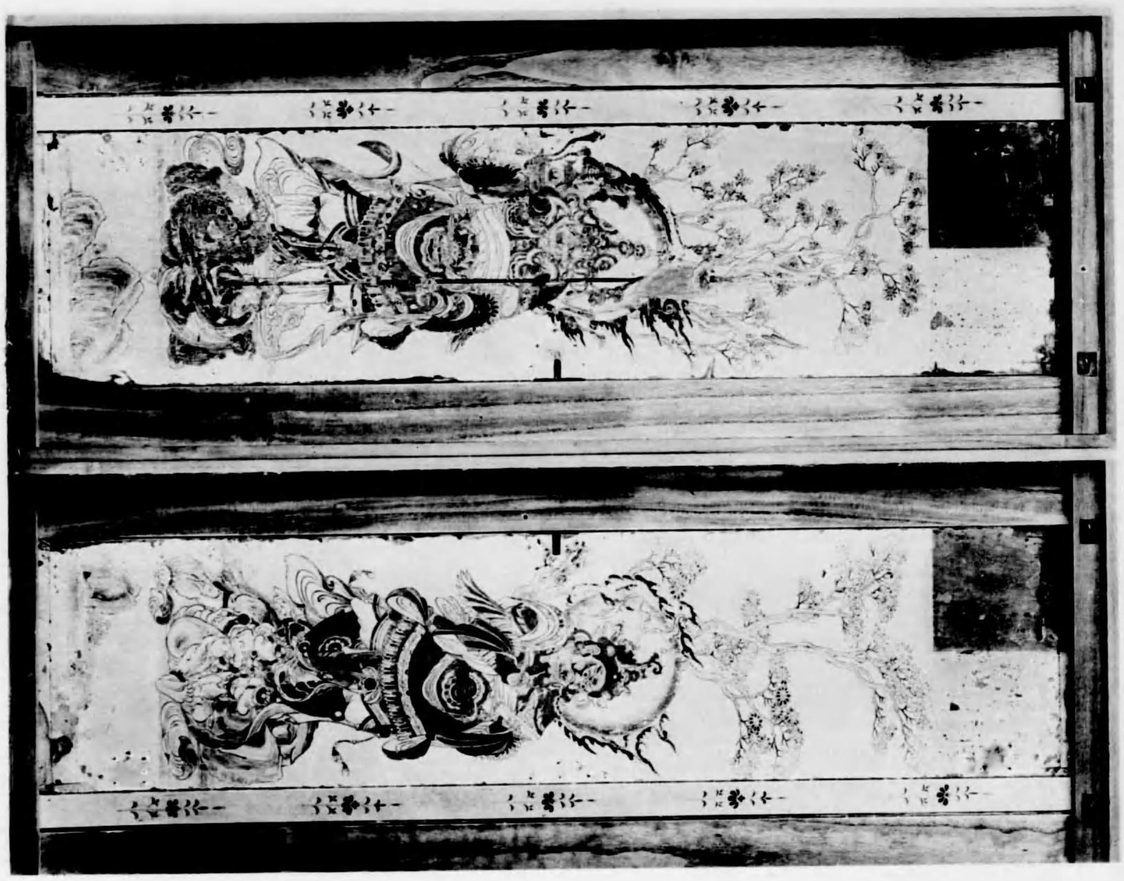
藤原初期の作品にして、金銀の蒔繪を纖細なる筆にて、佛の功德を圖化したるものなり。蓋には尾長鳥と樂器を配し、點綴するに花葉を以てす。蓋と身の側面には、山水の間に佛の出現を描けり。國寶神宮寺運唐草蒔繪經箱、並に延曆寺唐草金銀蒔繪箱及び當麻寺の倶利加羅龍蒔繪箱と類を同じくするも、其畫風は天平の餘波を享くるもの多きを見るべし。

二一　觀世音菩薩立像

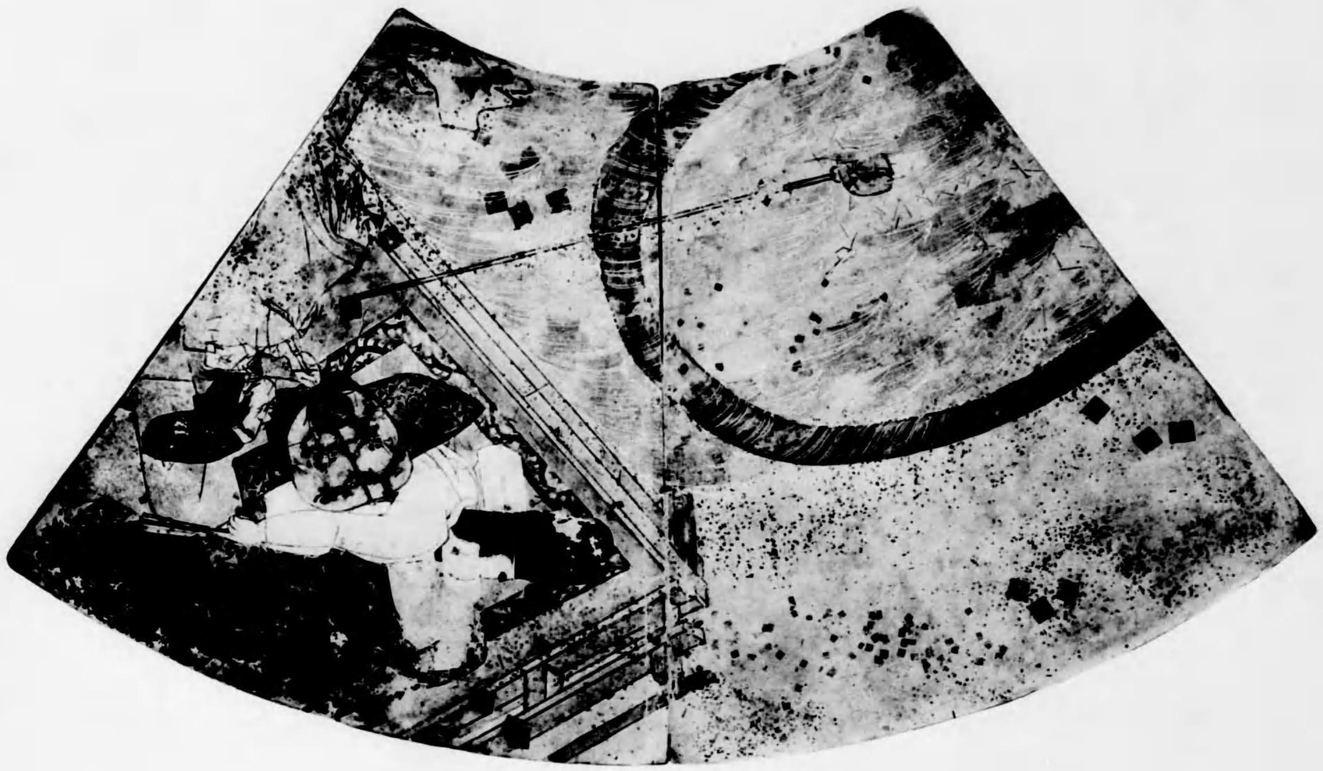
二四　青野青銅像

若般面能 六二

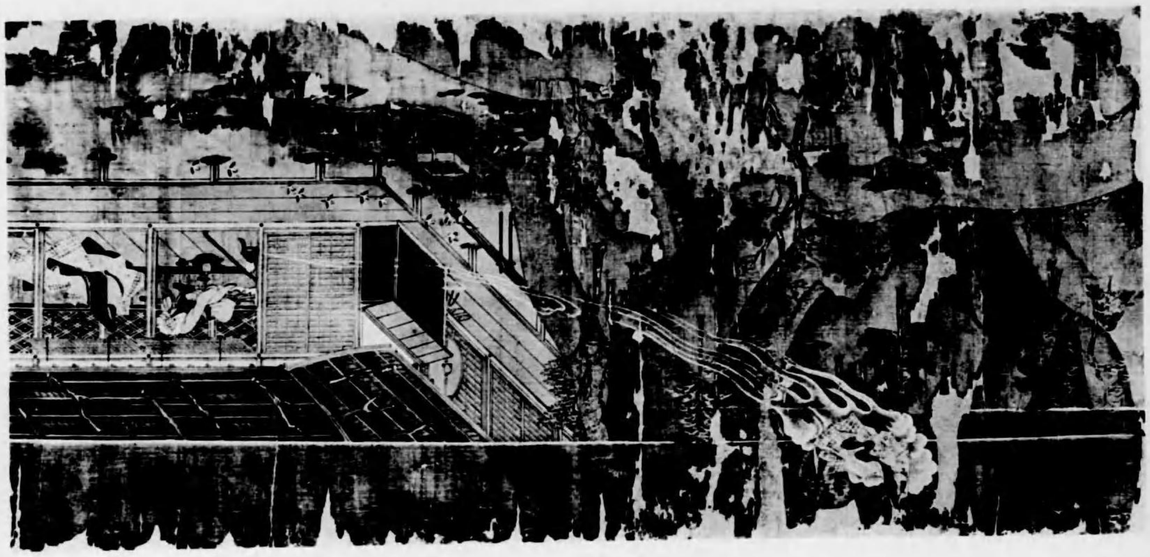
二七　周子居士（左）



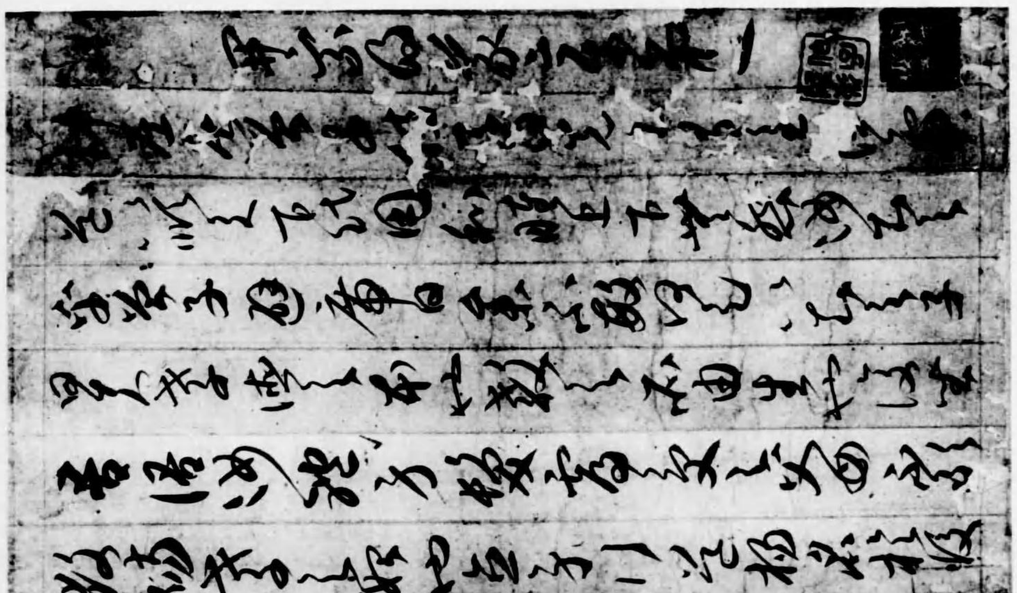
二九　屏子壁畫（四五）



三一　孔雀明王像



圖山王竹　五三



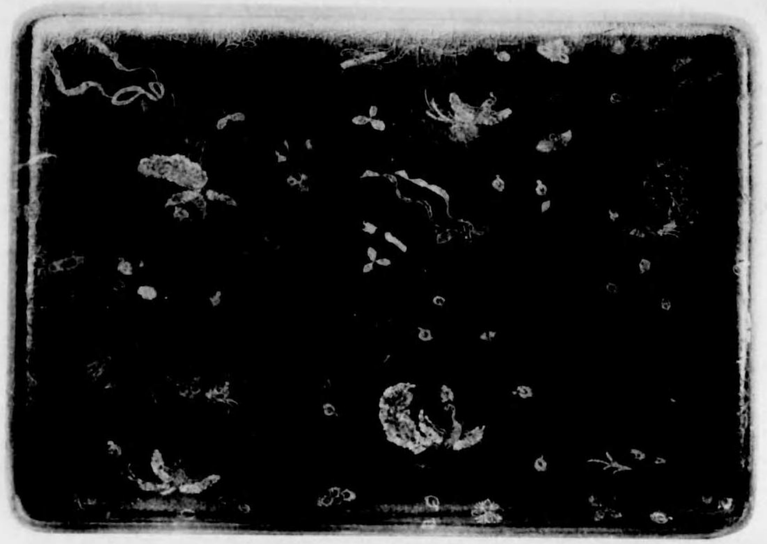
文選卷第六十　昭明太子撰　集注

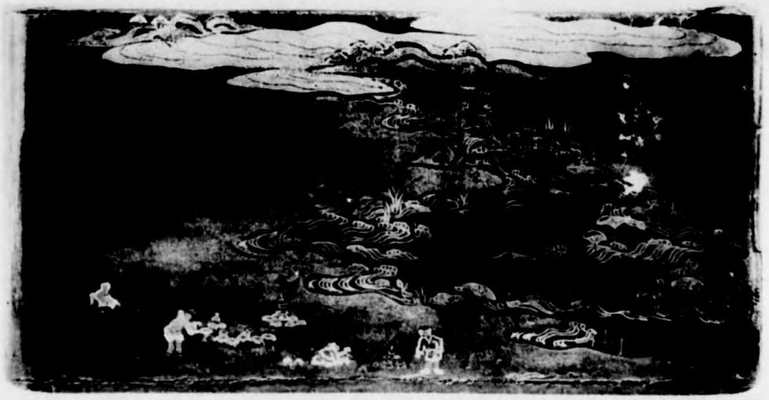
七二　曹子建七啓八首

七啓八首　銑曰啓開也初一首序發事理後七首是七啓也子建當見枚乘作七發傅毅作七激張衡作七辯駰作七依辭並美麗可以鑒照於身行之於世者人稍薄之故改憲故遂效之為七啓開導君王初一首序末一首陳西道中六首陳華美以誘之假言有賢人隱士在山林不願名物服飾唯明君聖王即出山林裏堅王崇賢慕古節謹度脩道招隱劉良曰啓開發天下令歸西道故託言賢人在山林有明君而後出裏君崇賢之意焉

曹子建

昔枚乘作七發傅毅作七激張衡作七辯崔駰作七依辭



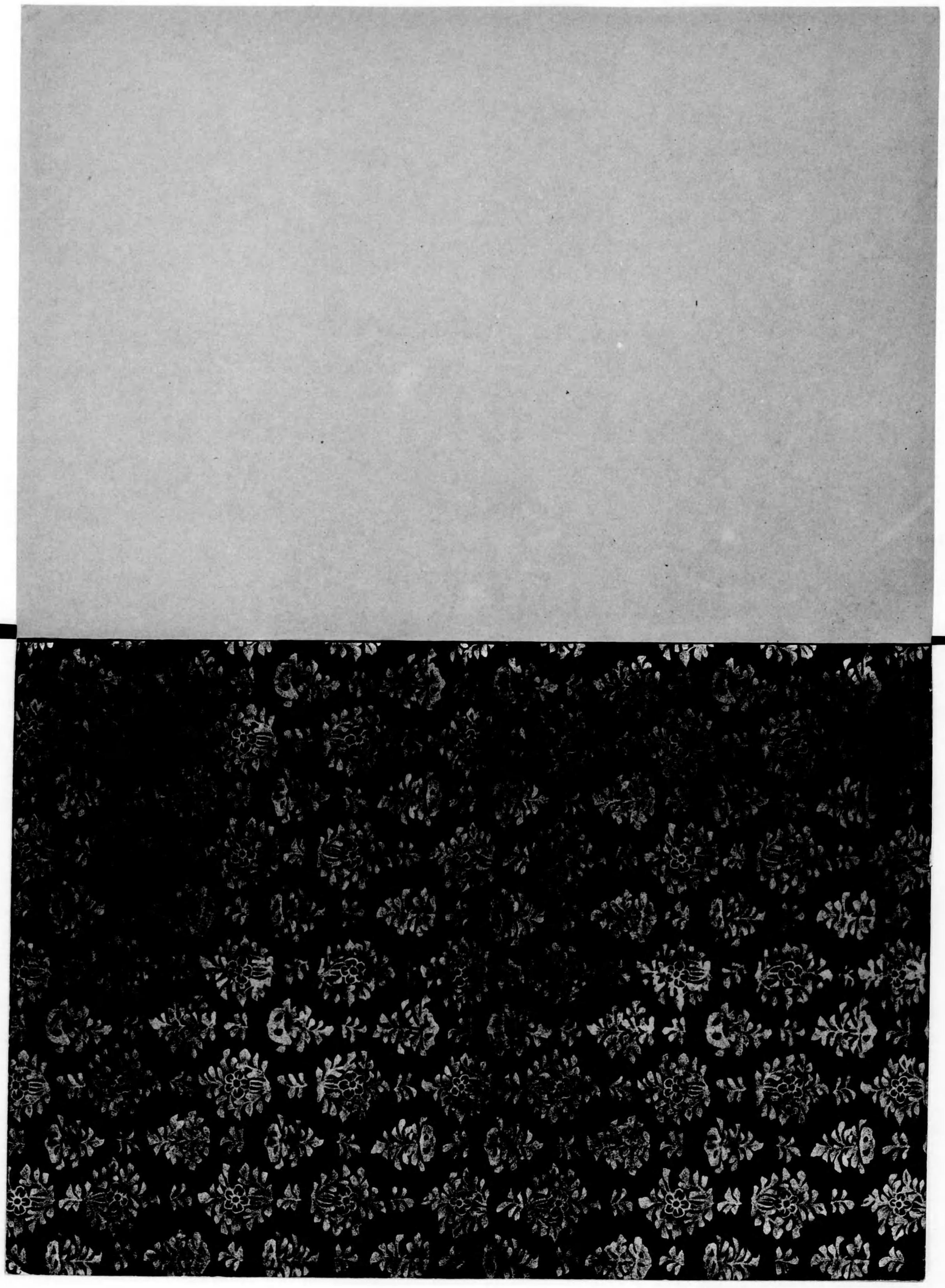


發行所
東京市麻布區
三軍町一番地
日本電報通信社
電話麻布一〇〇番
振替口座東京一〇〇〇〇番

定價
金壹圓
郵稅
金拾錢

大正十年十月廿五日印刷
大正十年十月廿五日發行

編纂兼發行人
印刷人
印刷所
發行所



終